森岡健二におけるコンポジション理論

平成１３年1月２０日
中央区立日本橋中学校
喜 多 見　　眞 弓

１，問題の所在

森岡健二はコンポジション理論を紹介し、「客観的でわかりやすい文章を『いかに』書くかを体系化した」[1] したことで知られているが、その一方でコンポジションを教条的に教えることに疑問を抱き、その無意味さ、無価値さを述べてもいる。そこで、彼の主張を追うことが、これからの文章表現指導の在り方を探る上で意味があると考え、森岡健二のコンポジション理論とは一体、何であったのかを明らかにしていく。

２，コンポジション理論の定義

森岡健二は、コンポジションを紹介するに当たり、次のように定義している。

> コンポジションという用語は、一般に日本語の「文章」あるいは「作文」と同じ意味で用いられることもあるし、また、「文章構成法」、「文章作法」、「作文法」、時によっては「文法」と同義に用いられることもある。（中略）しかし、いずれにせよ、コンポジションという名称が、表現の過程を、言語・線・色彩・韻律などの媒体によってとらえず、「構成する」（to compose）という過程からとらえていることは明らかであろう。つまり、下位単位と上位単位を整備して、全体を構成するという本来の意義が強く生きていて、名称そのものが文章についての考え方や方法論を端的にあらわしているといってよい。要するに、コンポジションはその名の示す通り、「構成」という点から組織された文章表現の体系で、思考も言語も符号も、表現過程に働くすべての要素が、その体系にとりいれられている。[2]

この定義は、表現を過程からとらえている点、しかも、「思考」との関連も謳っている点で画期的であった。

３，　　時代背景

戦後のわが国の国語教育は、アメリカから流れ込んだ経験主義的言語教育観に支配される。コンポジション理論はその中で広がっていったのであるが、コンポジション理論が輸入されるまでの時代背景に関しては、森岡は次のように分析している。

> 昭和二０年代の経験主義は、理論的にも無理であり、現実的にも日本における現場の教室に適合せず、二０年代の終わりには早くも系統学習や体系的学習に対する要望が生じた。そして、その要望に応え、国語教育の体系化に寄与するものとして、改めてコンポジションが見直されたということができよう。[3]

森岡がはじめてコンポジションという語を論文で使用したのは昭和３０年、雑誌『実践国語』誌上[4] である。それがやがて「文章構成法―文章の診断と治療―」という記念碑的著作に繋がっていったのだが、そこには、森岡自身の方向付けもさることながら、国語教育全般を組織的に系統づけるために、コンポジションの枠組みによる指導事項の明確化、すなわち、「表面的な経験主義の導入によって、系統学習の原理を見失い、いたずらに文法教育を過大評価して、いささか混乱状態にある国語教育が、コンポジションによって、本来の指導体制を確立すること」[5] への時代の強い要求があったとも言えるのである。

４，森岡健二とコンポジションとの出会い

コンポジションという語自体は昭和３０年まで使用していなかったものの、森岡健二とコンポジションとの出会いは実は意

1　中村敦雄「戦後国語教育におけるコンポジション受容の様相―『文章構成法―コンポジション』を中心にー」『学芸国語教育研究　第１７号』所収　平成１１年十月刊　東京学芸大学国語教育研究室　P、９

2　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号　　所収　P、２１３

3　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　P、２６

4　森岡健二「コミュニケーションの基礎理論としての文法」『実践国語』穂波出版社　昭和３０年２月号収

5　森岡健二「文章構成法―コンポジションー」『文部省国語シリーズ　　３９』光風出版　昭和３３年７月刊　P、７０（中学校におけるコンポジション能力の分析）

外と早い。「文章構成法―コンポジションー」[6] の「あとがき」からは、東京女子大学で国語表現法を担当させられた年から３年後の昭和２７年には、森岡が「内容構成」に関する理論を述べた“Direct Communicationｈという本を手にしていることがわかる。そのあたりの様子は次のように詳しく述べられている。

> それから[7] ３年ほど過ぎたころ、偶然、“Direct Communicationｈという本を手にしたが、これは副題に gA Manual of reading, writing, speaking, and the logic of communicationｈとあって、“読む”、“書く”、“話す”活動をコミュニケーションの論理、すなわち思考の論理として、同一の原理から説明し、かつ指導しようとするものであった。しかも、そこにはパブリック・スピーキングで学んだ“内容構成”の論理が、“読み”、“書く”に共通して展開されるのであった。ここに至って筆者は、“内容構成法”がコミュニケーション全般に通じる根本原理になっているという確信を得たのであるが、それでも、なお、それがコンポジションと呼ばれるものであることには気づかなかった。[8]

さらに、森岡健二が編集委員を務めた「学校図書」の昭和２８年発行の「中学国語」[9] の「二下」には、森岡健二が「アウトライン」の説明のために、「コンポジション」や「文章構成法―文章の診断と治療―」で引用した寺田寅彦の「とんびと油揚」[10] が載っていて、ここでアウトラインに対する詳しい説明があることは注目に値する。しかも、アウトラインの説明は、「コンポジション」等と比較すれば、やや言葉遣い等が中学生向けに易しくなっているものの、内容自体はほとんど変わっていない。むしろ、中学生にわかりやすく説明しようとしたために、一層、詳しくなっているとも言える。

そのことから考えても、森岡自身の中では、すでに昭和２０年代後半にコンポジションというコンセプトの萌芽が、コンポジションという語とは合体しないままではあったが、存在していたことは明らかである。

５，森岡健二がコンポジション導入において目指したもの

森岡健二は、「コンポジション」を「国文学　解釈と鑑賞」に連載するにあたり、「外国のコンポジションの紹介をしようとしているのではなく、日本語のコンポジションの建設を志している」[11] とはっきり記している。

また、「国文学　解釈と鑑賞」の「編集後記」においては、執筆のねらいが、次のように紹介されている。

> 森岡先生のコンポジションは、日本語を新しい方法によって分析し、その構成法をまとめて頂き、『作文』などという狭い範囲でなく、文体論、文章論にまで及んで説き進めて下さることになっております。[12]

ここからも、森岡健二が執筆を開始するにあたって目指したものが、アメリカのコンポジション理論の紹介という次元では決してなく、あくまでも「日本語の構成法」[13] の創設であり、「日本語のコンポジションの建設」であることは明らかである。

６，文法論としての出発

森岡がはじめてコンポジションという語自体を使ったのは昭和３０年、「コミュニケーションの基礎能力としての文法」[14] すなわち文法論においてである。

6　森岡健二「文章構成法―コンポジションー」『文部省国語シリーズ　３９』光風出版　昭和３３年７月刊

7　森岡健二が東京女子大学で「国語表現法」を担当し始めた年のこと。「文章構成法―コンポジションー」には、「今から８年前」とあるだけで、はっきりとした年は書かれていないが、「文章構成法―文章の診断と治療―」の「あとがき」には、昭和２４年と明記されている。

8　森岡健二「文章構成法―コンポジションー」『文部省国語シリーズ　３９』光風出版　昭和３３年７月刊　「あとがき」　P、１０４、１０５

9　学校図書「中学国語」監修者　志賀直哉・辰野隆・久松潜一・池田亀鑑　昭和２８年発行

10　学校図書「中学国語　二下」監修者　志賀直哉・辰野隆・久松潜一・池田亀鑑　昭和２８年発行　８７７　「研究して発表する」の中に、「三　とんびと油揚」P、５３、「四　まとめ方」P、７９として載っている。その「四　まとめ方」が、「コンポジション」あるいは「文章構成法」の内容とほぼ同じアウトラインの説明である

11　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　P、２１１

12　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　P、２３３「編集後記」

13　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　P、２３３「編集後記」

14　森岡健二「コミュニケーションの基礎能力としての文法」『実践国語』穂波出版社　昭和３０年２月号所収

この論文の中で森岡は、「文法教育という時の文法が、Ｇrammar であっては、どうも困るのである。」[15] と述べている。森岡の考えている「文法教育のおける文法」は、あくまでも、「実生活に必要なことばのはたらき」を伸ばす、つまり、「コミュニケーションの能力と直接結びついた文法」でなくてはならなかった。そして、だからこそ、そこに「composition の教育」との接点があったのである。

しかも、この論文の発表時点ですでに森岡は、John M, Kierzeh の「The Macmillan Hanabook（ママ）[16] of English」をアメリカのコンポジションのスタンダードな本として紹介[17] している。そして、次のようにまとめている。

> Ｃomposition の指導体系が確立されると、主題、骨組、段落、文、Ｇrammar、表記、くぎりなどの項目が、この大きな体系の中にははっきりと位置づけされてくる。指導の目的も、総て正確で効果的なコミュニケーションのためにということに統一されるのである。[18]

ここからは、森岡が、従来のＧ rammar 以上の文法としての働きを、コンポジションに託していたことははっきりしている。

７，森岡健二のコンポジション理論が内包する矛盾

７，１　思考との関連づけ

７，１，１　ねらい

日本語のコンポジション理論の確立を目指した森岡健二ではあったが、実際、彼が執筆した「コンポジション」は、結局、アメリカのコンポジション理論、とりわけＲ obert・Ｈ・Ｍ oore[19] のコンポジション理論の紹介に終始している感は否めない。そして、そのことが「日本語の構成法」確立の限界に通じることを、たとえ漠然としたものではあったにせよ、森岡自身は予感していたのではないかと思われる。というのも、「国文学　解釈と鑑賞」に掲載した「コンポジション」と、単行本「文章構成法―文章の診断と治療―」は、「問題」が付記されている以外は、ほとんどが一言半句変わっていない中にあって、ねらいに関しては、「わたし自身は、外国のコンポジションを紹介することにより、日本語のコンポジションの建設に興味を感じている」[20] と「志している」から「興味」にトーンダウンさせているからである。

では、「日本語の構成法」を確立できなかった原因はどこにあるのだろうか。

７，１，２，　森岡の定義と実際の分析法とのずれ

「思考」と「書く」過程とのかかわりについて、森岡は次のように捉えていた。

> 経験を人に伝える場合、複雑多岐にわたる経験の中から、必ずいくつかのことがらを選択し抽象しなければならない。そして、その選択と抽象の仕事は思考の働きである。次に、選択し、抽象したことがらをどのような順序で語るか、また、それぞれのことがらをどのようなことばで言いあらわすか、ということにも思考が働く。ことばとことばを文法的に整

15　森岡健二「コミュニケーションの基礎能力としての文法」『実践国語』穂波出版社　昭和３０年２月号所収　Ｐ、２２

16　森岡健二の表記ちがいで、正しくは、「The Macmillan Hand book of Engilish」である。

17　森岡健二「コミュニケーションの基礎能力としての文法」『実践国語』穂波出版社　昭和３０年２月号所収　Ｐ、２３

18　森岡健二「コミュニケーションの基礎能力としての文法」『実践国語』穂波出版社　昭和３０年２月号所収　Ｐ、２７

19　ＲOBERT HAMILTON MOORE「Effective Writing」１９５５年刊

例えば、「文章構成法―文章の診断と治療―」のおける「主題の展開―材料の配列―」は「時間的順序」「空間的順序」「一般から特殊へ」「特殊から一般へ」「原因から結果へ」「結果から原因へ」「クライマックス（漸層法）」「既知から未知へ」「問題解決順」「重要さの順序」「動機付けの順序」となっている。それに対し、「Effective Writing」では、「４，ORGANAZATION」の「Ｔ he Position of the Thesis」で、「Arrangement of Thesis」の「Natural Order」として、「The Order of Time」「The Order of Space」を挙がっている。また、「Logical Order」として「The Order of Climax」「The Order of General to Specific」「「The Order of Specific to General 」「The Order of Cause to Effect 」「The Order of Effect to Cause」「The Order of Familiarity」「The Order of Complexity」「The Order of Utility」が、さらに、「Psychological Order」として、「The Order of Acceptability」「The Order of Dominant Impression」「The Order of Psychological Effect」の項目が挙がっている。

20　森岡健二「文章構成法―文章の診断と治療―」至文堂　昭和３８年９月刊　Ｐ、３７３

備し、さらに修辞的に効果あらしめ、正確な文字と符号によって意味のまとまりを浮き立たせるという過程にも思考が作用する。[21]

このように捉えていた森岡が、「内容の整序から言語の使用にいたるまで、徹頭徹尾思考が働いていて、それを無視して書く方法を説くわけにはいかない」[22] と考え至り、「主題・材料の選択・抽象および配列・統合ということについての思考の方法には言語の違いに関係なく、普遍的な法則があるに違いない。」[23] と結論づけていくことも、また当然のことであったと理解できる。

ただ、森岡は具体的には、「文における語の重複、思想の飛躍、代名詞の使用、主述の照応、修飾語の位置、宙に浮いた修飾語など、どの言語にも共通して思考上の誤りの類型を発見することが容易である」[24] ことが、即、「思考の法則」は見つけ出せると考え、分析面ばかりを偏重して論を展開していく。

つまり、森岡は、コンポジション理論自体の生成過程を、「『書けない』原因の研究を積み上げることによって次第に生成されたもの」[25] と考えているのだが、そういう意識があるゆえに、結局は、分析的な部分ばかりが生長し、文章を全体としてのまとまりを備えた総合体としてとらえる意識が希薄になっていった傾向を認めざるを得ない。中村敦雄の言葉を借りれば、「分析と統合のバランス」[26] を欠いたものになっていくのである。

７，２　読むことと書くことの相違

森岡が考えている文章の到達点は次の１０点である。

１，　わかりやすさ
２，　価値ある主題
３，　主題による統一
４，　具体的で強力な材料（細目）
５，　論理的、かつ効果的な構成
６，　効果的な段落と、段落から段落への明瞭な展開
７，　内容を正確にあらわし、ただしく、かつ変化に富む文
８，　正確で、具体的で、明確な言語
９，　正しい文法、表記、句読法、書式
１０，独創性[27]

以上のような地点に到達するためには、「内容とことばの背後にある思考力を重視し、正しい思考にもとづいて、内容とことばを構成的に整え、創造的な思想を文章によって生産しようとする」[28] ことが必要だと森岡は考えた。つまり、彼にとってコンポジション理論は、林四郎が、いみじくも「すじの通った考えをまとめること（Ｃlear　Ｔhinking）の方法」[29] と紹介し

21　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　Ｐ、２１２
22　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　Ｐ、２１２
23　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　Ｐ、２１２
24　森岡健二「コンポジション　第一稿　概説」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３５年１０月特大号所収　Ｐ、２１２
25　森岡健二・水谷静夫「言語・その研究（５）教育と言語（三）」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和４４年４月号所収　Ｐ、１６３
26　中村敦雄「『文章構成法』の理論に関する一考察―昭和三十年代前半における森岡健二の所説を中心に―」『国語科教育』第四十六集所収　平成１１年３月刊　Ｐ、７０
27　森岡健二「コンポジション　第四稿　文章を書く手順」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３６年１月号所収　Ｐ、１７３
28　森岡健二「文章構成法―文章の診断と治療」至文堂　昭和３８年９月刊「はしがき」
29　林四郎「文章の構成」『言語生活』筑摩書房　昭和３４年６月号所収　Ｐ、３１
「Ｃlear　Ｔhinking」という語自体は、昭和３１年の論文「自分を育てること―話術への反省」の中で、森岡自身によっても使われている。森岡はアメリカのパブリック・スピーキングの目標を「はっきり考えること（clear　thinking）」「人格の向上（personality　development）」「よい人間関係（human relation）」であると説明している。

、自らも「分類整理箱」[30] と称しているように、まさに思考の整理学的な意味があったのである。

そして、重要さの大小、主題の一貫性などが一目瞭然になる存在として森岡が考え出したのが、建築家における「青写真的役目」[31] を担う、文章の構成を視覚化した「アウトライン」[32] だった。

ただ、森岡の考えたアウトラインは、あくまで理解の成立過程に準じたものであった。その顕著な例が、寺田寅彦の「とんびと油揚」という文章を例にとっての、森岡のアウトラインに関する次のような説明である。

> 寺田寅彦博士がどのような方法で文章の準備をされたかは知らないが、アウトラインの図式に還元してみると、非常にきれいに論理が発展していることがわかる。もし、文章を書く前に、このような青写真ができていれば、文章を書くのは、多くの人にとって容易なものとなろう。[33]

要するに、森岡にとって、コンポジションは「言語活動全体の指導原理」[34] としての役目を担いうるものであり、コンポジション理論の要とも言えるアウトラインは、「人間の思考および理解の方式は、全体としてものを把握しようとして部分に分析するが、分析された部分は、常に全体の中に置き、全体に位置づけて把握される」[35] という考えを立証しうるものであった。

ただ、「読み」の過程を安易に「書く」過程に転化させる考え方はやがて森岡の中で変化し、昭和５１年には次のように述べている。

> 一体、作文する前というのは自分の結論がまだはっきりしない。一種のカオスの状態ですよ。そういう状態から書き始めて、自分自身の頭の中で討議しているうちに、だんだん先が見えてきて、はっきりした結論が出ていく、ということですね。それが読解教育で、はたしてそういう思考のプロセスを通ることができるかというと、おそらくできないんじゃないか。[36]

このような「書くこと」と「読むこと」のプロセスに対する緻密な分析が、コンポジション理論を導入した当時には行われていなかったのである。

８，昭和４０年代の森岡

８，１「錯覚」の文章構成法

昭和４７年の「書くことの繰り返しをとおして」という論文の中で、森岡は次のように述べている。

> 私がかつて、「文章構成法」という本を著したとき、私はこれこそ文章を書く過程を著したもので、このとおりに書いていけば、あるいは、指導すれば、文章はなんとか書けるようになるのではないかと考えていた。しかし、今やそれは錯覚以外の何ものでもないと思っている。つまり、文章構成法的分析は、本稿で述べた文章研究者のそれであって、生きた頭に流れている、感動に裏付けられた具象的な対象ではなく、文章を分析した結果としての抽象的なことばにすぎない。したがって、文章構成法における種々の基準は、文章を書く過程における指針にはなり得ず、むしろ、書いたあとの推考もしくは批正の拠り所とすべきものと思う。[37]

つまり、それまでは技術主義ではないと断ることがあったにせよ、それでもやはり一つの大きな柱であったアウトラインのたて方等、コンポジション理論の技術的な面を基礎として徹底することさえも、ここでは「書く過程の指針」にはならないと否定しているのである。

森岡の実際に教える中で得た結論は次のようなものであった。

30　森岡健二「コンポジション　第九稿　主題の展開―アウトライン」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂昭和３９年６月号所収　P、１３９

31　森岡健二「コンポジション　第九稿　主題の展開―アウトライン」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３６年６月号所収　P、１５３

32　ＲOBERT HAMILTON MOORE「Effective Writing 」１９５５年刊の中には「INFORMAL　OUTLINE」の項もあるが、森岡の「文章構成法」においてはそれは論述されていない。

33　森岡健二「コンポジション　第九稿　主題の展開―アウトライン」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３６年６月号所収　P、１５８

34　森岡健二「文章の構成法―コンポジションー」『文部省国語シリーズ　　３９』光風出版　昭和３３年７月刊　P、５

35　森岡健二「コンポジション　第九稿　主題の展開―アウトライン」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂　昭和３６年６月号所収　P、１５３

36　森岡健二・林大・林四郎座談会「作文教育の目標」『現代作文講座７　作文教育の方法』所収　明治書院　昭和５１年１１月刊　P、３０７

37　森岡健二「書くことの繰り返しをとおして」『教育科学　国語教育』明治図書　昭和４７年９月号所収　P、８

主題・構成・材料その他について、どんなに懇切に講義しても、実際に書く際の頭の中のプロセスは、講義で言うように規則どおりにはいかないし、ほとんど書くときの指針にならないことが多い（中略）。また、これらの文章やその書き方についての講義ほど無味乾燥でおもしろくないものはないし、講義すればするほど書く意欲を削ぐ恐れがある。[38]

以上のような結論を森岡が得ていくことが、「書くことの繰り返し」に重きを置いて「感じやすい心、物を見る目、考える精神」に到達することを主張していく大きな要因であったのではないか。ただ、「錯覚」とまで主張している裏には、そういった彼自身の実感もさることながら、他の面も動機となっていることは十分考えられる。

８，　　２　思考の位置づけ

昭和４３年に、森岡は再び「文章構成法」を著している[39]。　ここで、森岡は、「文字と文字を綴って語を作り、語と語を綴って文を作るという『綴り方』の技術でも、世にいう文章はできるかもしれない」が、しかし、それは「往々にしてブロック＝キャップ的な作品になるおそれ」[40]　を含んでいると述べ、コンポジションの理論性を訴えるのである。

そして、次のように述べている。

文章構成法でいう文章は、文字どおり構成体であって、ピラミッドの頂点（主題）に達するために、必要な材料を整え、配置し、むだなくそれらを組み立てようとする。頂点が二つになったり、土台の一角が欠けたりすることを拒否し、最初の青写真どおり計画的に順序よく積み上げ、一つのまとまりに仕上げていくことを要求する。要するに、「構成」ということは、単に部分部分の繋ぎ方の技術でなく、一定の構想のもとに一つのまとまった全体を作ることにある。[41]

だからこそ、文章を書く過程で、思考が整理できるというのである。

興味深いのは、この論文の中で森岡が、「文章構成法による作文指導が思考力を重視する余り、無味乾燥な論理主義に傾き、表現本来の活動である情緒・感情の表白という面を無視しすぎるのではないか」という批判に対し、「確かに文章構成法の考え方を紹介するにあたっては、日本の現状からみて心情よりも論理の面を強調する必要があったし、おそらく筆者もそこを力説した者の一人に数えられるかもしれない。」[42]　と、昭和３０年代当初の、コンポジション理論に対する自らの絶対的な信奉姿勢を反省する気配を見せ始めている点である。

８，３　コミュニケーション教育否定の本意

８，３，１　コミュニケーションの目的による「書くこと」

森岡のコミュニケーションという問題に関する関心は、彼が研究者としての地位を築き始めた当初から強い。昭和２９年、森岡は、「コミュニケーションと人間」という論文を発表しているが、それにおいて、「歴史的に見ても、コミュニケーションが社会の発展と平行して発達してきたことは、すでに周知の事実で、これも、また、コミュニケーションと人間の意識の深さを物語っている。」[43]　と述べているばかりか、コミュニケーションは「行動の主体としての人間の構造に直接結びついている」[44]　と論じてもいる。

こういったコミュニケーションの重要性を認識している森岡の姿は、他の論文においても至るところで見受けられる。森岡は昭和３３年の「文章の構成法―コンポジション―」[45]　で、アメリカのコンポジションを紹介するに際し、「コンポジションは、読む、書く、聞く、話す、考えることの基礎能力と考えられているが、これは一世紀近くの間、コミュニケーションの能力の改善を目指して精選されてきたものだけに、確かに言語活動全般の指導原理と見なされるだけのものを含んでいると思わ

38　森岡健二「これからの国語＜表現＞指導　高等学校」『国文学　解釈と教材の研究』学燈社　昭和５２年６月臨時増刊号所収　Ｐ、２２２
39　森岡健二「文章構成法」『作文講座　第一巻』所収　明治書院　昭和４３年１月刊
40　森岡健二「文章構成法」『作文講座　第一巻』所収　明治書院　昭和４３年１月刊　Ｐ、８２
41　森岡健二「文章構成法」『作文講座　第一巻』所収　明治書院　昭和４３年１月刊　Ｐ、８２
42　森岡健二「文章構成法」『作文講座　第一巻』所収　明治書院　昭和４３年１月刊　Ｐ、８２
43　森岡健二「コミュニケーションと人間」『社会思想研究』社会思想研究会刊　昭和２９年１１月号所収　Ｐ、２０
44　森岡健二「コミュニケーションと人間」『社会思想研究』社会思想研究会刊　昭和２９年１１月号所収　Ｐ、２０
45　森岡健二「文章の構成法―コンポジション」『文部省国語シリーズ　　３９』光風出版　昭和３３年９月刊

れる」[46] と述べている。

また、昭和３８年の「文章構成法―文章の診断と治療―」では、「コンポジションでは（中略）効果的なコミュニケーションのためにという目的意識がはっきりしている」[47] とも述べている。

さらに、昭和３９年に発表された「表現と効果」という論文の中では、「“表現”を発信と受信とのコミュニケーションの過程としてとらえる」[48] ことを前提とした上で、独白的な性格を有する随筆についてさえも、「たとえ、受信者を意識しないにしても、その文章をだれかに読んでもらうことを予想して書いている以上、やはり受信者の存在を認めなければならない。」[49] と述べている。

それらの多くの発言に共通しているのは、コミュニケーションの立場に立って作文教育を論じていこうとする森岡の姿勢であった。

８，３，２　「内言」を育てる目的による「書くこと」

昭和４２年、全国作文教育研究会の講演で、森岡は作文教育の目的に触れ、「対人的な行為」とは異なり、あくまでも「言語能力を伸ばすこと」であると発言する。要するに、作文教育の目標は、「内語[50] の力を伸ばすこと」であるとし、コミュニケーション教育のために行うことと明確に区別するのである。[51]

また、昭和４３年、新潟県で講演した中でも森岡は、「作文教育をコミュニケーション教育の道具として位置づけるということにはどうも疑問を感じます。」[52] と繰り返している。

さらに、昭和４２年に出版された、「言語教育の本質と目的」[53] の中では、「内語」と「外語」を「次元の異なる言語」[54] とまで言いきり、コミュニケーション教育と「内語教育」については、「現代の言語教育では、二者を一律に扱うような形で同居させ、言語教育の体系を破壊し、二兎を追って二者ともにその指導の能率をおとしている観がある。」[55] と述べ、改善の必要を訴えている。これらの森岡の発言は、それまでのコミュニケーションを目的に掲げてきたことから大きく方向転換していると言える。

しかしながら、さらに検討してみると、森岡自身さえ明確には自覚していなかったかもしれないが、実は、言語教育の自立を促すような考え方の萌芽は、昭和３０年代当初から見られる。

例えば、森岡は昭和３１年の「国語教育と言語教育」[56] という論文において、従来の国語教育の枠に縛られない言語教育、すなわちコミュニケーション教育の必要性を訴えている。しかし、その一方で、この論文の中で森岡は、国語教育自体は従来

46　森岡健二「文章の構成法―コンポジション」『文部省国語シリーズ　３９』光風出版　昭和３３年9月刊　P、２４

47　森岡健二「文章構成法―文章の診断と治療―」至文堂　昭和３８年９月刊　P、３７５

48　森岡健二「表現と効果」『講座　現代語４　表現の方法』所収　明治書院　昭和３９年２月刊　P、１

49　森岡健二「表現と効果」『講座　現代語４　表現の方法』所収　明治書院　昭和３９年２月刊　P、９

50　森岡健二「コンポジションの基礎理論と作文教育」全国作文教育研究協議会・講演『作文教育』第七集　日本作文教育研究会　昭和４２年１２月号所収　この中では「内言」ではなく、「内語」という語が使用されている。本論文においては、引用部分以外は、すべて「内言」で統一して表記する。

51　森岡健二「コンポジションの基礎理論と作文教育」全国作文教育研究協議会・講演『作文教育』第七集　日本作文教育研究会　昭和４２年１２月号所収　P、４～１８

52　森岡健二「作文教育の方法」新潟県高校教育研究会・講演（昭和４３年）『現代語研究シリーズ第４巻　ことばの教育』所収　明治書院　昭和６３年７月刊　P、１１２

53　森岡健二「言語教育の本質と目的―母国語教育の立場からー」『言語教育学叢書第１期・一巻』所収　文　化評論社　昭和４２年７月刊

54　森岡健二「言語教育の本質と目的―母国語教育の立場からー」『言語教育学叢書第１期・一巻』所収　文　化評論社　昭和４２年７月刊　P、４４

55　森岡健二「言語教育の本質と目的―母国語教育の立場からー」『言語教育学叢書第１期・一巻』所収　文化評論社　昭和４２年７月刊　P、６３

56　森岡健二「国語教育と言語教育」『学図』学校図書　昭和３１年９月号所収

のものともコミュニケーション教育とも「別科として分離して行うべき」[57] ことも、同時に主張していたのである。「知識思考、パーソナリティー、人間関係」という土台があってこそのコミュニケーションであることが忘れられて、「言語の技術教育であるかのごとく誤解されている」[58] 状態を憂い、そのような流行のコミュニケーション教育のままでは、先詰まりになることを、すでにその時点で予見していたのである。

要するに、森岡の目指してきたコミュニケーション教育は、あくまでも「科学的に体系づけられたコース・オブ・スタディーに沿っていわれるべき」[59] ものであり、それゆえ、コンポジション教育との兼ね合いが可能だった。だが、森岡自身の目に映った４０年代初めの現状は、と言えば、コミュニケーション教育を高く掲げたばかりに、結局は、狭小の意味の国語教育さえ疎かにするような、単なる混乱状態しかもたらしていなかったのである。

そのため、森岡はコミュニケーション教育の否定という立場をとらざるを得なかったのである。が、実は、森岡の本意は、コミュニケーションという大枠ですべてを包み込もうとしたことへの反省であるとも言えるのである。

ただ、「言語による思考教育」の必要性に迫られたためとは言え、森岡が「内言」教育のためのコンポジションという考え方を標榜したことは、コンポジションこそが「書く」ばかりでなく「聞く」「話す」「読む」という領域においても「核」となるものだという、それまでの彼の主張とは相容れなかった。その結果、好むと好まざるにかかわらず、それまでのコンポジション理論との決別を森岡自身に強いることに繋がるのであり、４０年代は、森岡にとって、新たな目的を掲げつつあるコンポジション理論への過度期でもあったのである。

９，昭和５０年代の森岡

９，１　語彙力の育成

昭和５１年、渡辺昇一との対談において、森岡は戦後の国語教育を総括して、「結局、文字とか単語とか最も基本的なことを分解的に教えるのをおろそかにしてきた、無駄の多い教育」[60] と一言の下に切り捨てているが、その中には彼自身が輸入したコンポジション理論も当然含まれている。

まず、昭和５１年はじめ、森岡は「国語教育とは何か」という論文の中で、次のように述べている。

> どんなにコンポジションの方法を生徒に吹き込んでも、それがうまくいくとは思えない。文章というものは人によってそれぞれ違うし、さらには同じ人でも一つ一つみな違う。主題のとらえ方、材料の選択、構成のしかたなど、コンポジションの一般的な方法を、教条的に持ち出して内容の理解と表現に役立てようとしても、およそ無理である。[61]

彼の言葉をそのまま使えば、その原因は、「内容の理解と表現は、一般的な技術でできるものでなく、型や規則で押さえきれない思考や感性あるいは直観に依るから」[62] だという。また、「コンポジションの説く主題のとらえ方や構成のしかたは、決して人間の頭の中で進行する理解過程や表現過程ではない。」[63] からだという。

そして、「一般的な共通項で理解と表現のプロセスを指導しようとしても、それはほとんど無力であるばかりでなく、かえって生徒の思考を枠に嵌め、制約を与えて、自由にして創造的な精神活動を阻害する」[64] 結果に繋がると警告し、「実際に頭の中に動いている理解過程や表現過程は、行きつ戻りつ試行錯誤を重ねながら、一つ一つ固めていって、ついに全体の理解や表現に達する」[65] ものだからこそ、「方向の決め手となる羅針盤の役割を果たすものは文字と語句以外にはない。」[66] と断言す

57　森岡健二「国語教育と言語教育」『学図』学校図書　昭和３１年９月号所収　Ｐ、３
58　森岡健二「国語教育と言語教育」『学図』学校図書　昭和３１年９月号所収　Ｐ、３
59　森岡健二「国語教育と言語教育」『学図』学校図書　昭和３１年９月号所収　Ｐ、２
60　森岡健二・渡辺昇一対談「国語学者と英語学者の対話ー社会・文化・言語」『ソフィア』上智大学　昭和５１年冬号所収　Ｐ、３５７
61　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３０
62　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１
63　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１
64　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１
65　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１
66　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１

るのである。「思考力を育てる土台となる語彙力そのもの」[67] の育成こそ国語教育では必要だと訴えるのである。

９，２　森岡の辿り着いた結論

森岡は、次のようにも述べている。

> この学生は一体、何を言いたかったのか。確かに筋は通らなくてモヤモヤしているけど、言いたいことはこういうことじゃないのか。言葉遣いの点では伝わってこないけど、何かを一生懸命に考えようとしているのではないのか。作文教師はそういうことを見抜かないといかん。単にどう書くかの問題ではなくて、何を書くかという問題にまで踏み込んでいかなければならない。つまり、How to じゃなくて、What to までいかないと、作文教師になれない。[68]

では、森岡のいう「What」の内容とは何なのだろうか。それを考える上での一つの指針になるのが、「表現とは所詮人間の産物である。人間から生み出されてくるものである。原動力である人間に目を塞いで、生み出し方だけを教えるのは本末転倒ではあるまいか。」[69] という言葉である。

これは、コンポジション理論との完全な決別の言葉ともとれるが、実はそういう面以上に彼が訴えたかったのは、「思考力」というものが単に論理的に思考する力のみを指すのではなく、漠然と感じ取る力をも含んだものであり、「人間性」と密接に関係しているということではないだろうか。

こういった「考える力」と「感じる心」の森岡の主張の一体性は、他の論文等においても見受けられる。

例えば、森岡は、昭和５２年に「着想の卓抜さ、人間味の深さ、創造力の逞しさ、柔軟な水平思考、その他、文章構成法の用語ではとらえられない、文章の微妙なあや、魅力、おもしろさ」[70] を目指すことを提言しているが、それはその時限りの発言ではない。昭和５４年には、「西尾理論の主題・構想・叙述は、深みのある精神性を取り入れたコンポジション」であり、「西尾理論が風靡して昭和十年代に回帰したい気持ちを押さえる（ママ）ことができない。」[71] とも述べているのである。

さらに、遡れば、自らのコンポジション理論を自ら「錯覚」と糾弾した「書くことの繰り返しを通して」という昭和４７年の論文でも、「感じやすい心、物を見る目、考える精神を育てたい」[72] と述べている。

こういう森岡の文言だけを取り出せば、コンポジション理論の外見とは相容れない、新たな森岡の考え方が示されたようにも感じられる。

だが、実は、「文章構成法―文章の診断と治療―」のはしがきにおいてすでに森岡は、「真にクリエーティブな表現をするためには、感じ考える心を育てるとともに、ことばの訓練をすべきである。」[73] と述べている。森岡にとって、考える精神は感じる心が基盤にあってこそもたらされるものだということは、どんな時代においても少しも揺らいではいなかったのである。

１０，森岡健二のコンポジション理論が意味するもの

１０，１過程への着目―時枝誠記の言語過程説との関連―

森岡は、時枝の影響を次のように述べている。

> 昭和一二年に大学に入り、一五年から大学院に籍を置いた筆者は、まさしく時枝旋風のさ中（ママ）に学生生活を過ごしたといっていいかもしれない。[74]

森岡はこう述べた後で、その当時が、ソシュールの学説が定着して、「ソシュールを学ばずして、国語学に入っていけない有

67　森岡健二「国語教育とは何か」『言語生活』筑摩書房　昭和５１年２月号所収　Ｐ、３１

68　森岡健二・林四郎対談「これからの作文教育」（上）『現代作文講座　第２巻　付録月報』明治書院　昭和５１年１０月刊　Ｐ、２

69　森岡健二「表現指導のあり方」『国語展望』尚学図書　昭和５５年１０月号所収　Ｐ、３４

70　森岡健二「これからの国語＜表現＞指導　高等学校」『国文学　解釈と教材の研究』学燈社　昭和５２　年９月臨時増刊号所収　Ｐ、２２１

71　森岡健二「西尾先生の復活」『月刊国語教育研究』第８４集　昭和５４年５月号所収　Ｐ、５８

72　森岡健二「書くことの繰り返しを通して」『教育科学　国語教育』明治図書　昭和４７年９月号　Ｐ、８

73　森岡健二「文章構成法―文章の診断と治療」至文堂　昭和３８年９月刊「はしがき」

74　森岡健二「言語過程説の展開」『講座　日本語文法　　文法論の展開』所収　明治書院　昭和４３年１月刊　Ｐ、２１４

様であった」[75] と付け加えている。

その結果、対立する学説の渦中に投げ込まれた森岡が、「大なり小なり『言語とは何ぞや』という根本問題を考えることを余儀なくされた」[76] のも自然なことであった。しかも、森岡にとって、「時枝理論は決して他と異質なものではなく、新しい学問の動きに密接に関連した新しい学説として受けとることができたのである。[77]」

つまり、森岡の原点には、時枝の言語過程説があったとも言えるのであり、しかも、その捉え方は、「いわゆることばのかかわっている現象ならば言語過程説によって何でも説明できるというのが時枝の考え[78]」というものであった。

そういう森岡の受け止め方は、永野賢らとのシンポジウムにおける森岡の次の発言とも結びつく。

> 言語過程説は文法の基礎の方法論じゃないのじゃないだろうか。むしろ、言語過程説がもっとも有効なのは、いわゆるコミュニケーションとか言語生活とか、「続編」で先生が取り上げようとした分野こそ、もっとも有効に働くのじゃないか。[79]

ここからは、森岡が言語過程説を単なる文法論という枠組みでは捉えていない姿が浮き上がる。要するに、森岡の言語過程説の位置づけは、「コミュニケーションとか言語生活の方向に発展していくべき方法論」[80] であり、実際、言語過程説によって、それまで国語学で扱わなかった分野まで開拓されたと把握しているのである。しかも、だからこそ、発展性を常に持ち続ける理論だと、森岡は考えているのである。

その一方で、時枝の影響を受けた森岡は、言語過程説の応用範囲が幅広い故に、「ことばの問題ならなんでも、自由に扱うことになって、方法的に学問としての純粋さを失わせる」[81] ことを懸念し、言語過程説に代わり、しかも言語過程説に連なるような一貫する理論を求めていた。そして、文法から表現全般に関心を持っていた森岡が出会ったのが、「to compose」という、表現表出過程に視点を当てたコンポジション理論だったのであり、「文章構成法」だったのである。

１０，２　思考の再構成から創構へ

昭和３９年に行われた座談会において、「自分なりのコンストラクション」に言及していないと益田勝実らに指摘された際、森岡は、「文章構成法」があくまで「『初めにことばありき』じゃない、『初めに事実ありき』」[82] という考え方に基づいていることを強調し、自分なりのコンストラクションの存在を主張している。さらに、ことばでものを考える限り、「文章構成法―文章の診断と治療―」で目指したような「真にクリエーティブな表現」[83] が不可能なばかりか、「思考の行き詰まりである」[84] とさえ述べ、ことばの論理を先に教え、その論理からものをみるような指導法を否定している。つまり、「いかに事実を見出し、そしてそれをいかに発見し、いかに自分自身の思想をつくり、論理的な認識を自分がしていくかということからコンポジションが始まる」[85] ことを強調し、とかく批判の理由の第一に挙がられてきた「言いたいことがない」学習者に対し、コンポジションはどういう価値があるかという問題に関しても、有効な働きをすることを訴えている。

ただ、「言いたいことがない」「書くことがない」と発言する者にとっては、「思考」の有無というより、事実と認識がなかな

75　森岡健二「言語過程説の展開」『講座　日本語文法　　文法論の展開』所収　明治書院　昭和４３年1月刊　P、２１４
76　森岡健二「言語過程説の展開」『講座　日本語文法　　文法論の展開』所収　明治書院　昭和４３年1月刊　P、２１５
77　森岡健二「言語過程説の展開」『講座　日本語文法　　文法論の展開』所収　明治書院　昭和４３年1月刊　P、２２５
78　森岡健二「言語過程説の展開」『講座　日本語文法　　文法論の展開』所収　明治書院　昭和４３年1月刊　P、２２８
79　森岡健二・永野賢・渡辺実・築島裕「シンポジウム　時枝文法をどのように発展させるべきか　文法論の展開」『講座　日本語の文法　別巻　シンポジウム時枝文法』所収　明治書院　昭和４３年５月刊　P、１３３
80　森岡健二・永野賢・渡辺実・築島裕「シンポジウム　時枝文法をどのように発展させるべきか　文法論の展開」『講座　日本語の文法　別巻　シンポジウム時枝文法』所収　明治書院　昭和４３年５月刊　P、１３３
81　森岡健二・永野賢・渡辺実・築島裕「シンポジウム　時枝文法をどのように発展させるべきか　文法論の展開」『講座　日本語の文法　別巻　シンポジウム時枝文法』所収　明治書院　昭和４３年５月刊　P、１５５
82　森岡健二・寒川道夫・益田勝実座談会「作文とコンポジションの問題」『国語通信』筑摩書房　昭和３９年８月号所収　P、９
83　森岡健二「文章構成法―文章の診断と治療―」至文堂　昭和３８年９月刊「はしがき」
84　森岡健二・寒川道夫・益田勝実座談会「作文とコンポジションの問題」『国語通信』筑摩書房　昭和３９年８月号所収　P、９
85　森岡健二・寒川道夫・益田勝実座談会「作文とコンポジションの問題」『国語通信』筑摩書房　昭和３９年８月号所収　P、７

か結びつかないことが考えられる。そして、自分が出会った事実と自分の認識さえも結びつけられない者が存在するという事実が、「思考力を育てる鍵」となるのが「語彙」だという森岡の結論に密接に結びついていくのである。

また、林四郎が書くことの意義を「まとめる」と表現したことに際し、森岡はわざわざ「自分の考えができる」と言葉を足して言い直している[86]が、その点にも、思考というものをその表出過程のみならず、生成過程においても捉えようとしている森岡自身の姿が垣間見えるのである。

考えてみれば、文章を書くという営みは、自分の言いたいことを表すために、既成の表現を探し、当て嵌めるという次元にはとどまらない。それどころか、まさに新たに自ら表現をつくりだすことを通して、自分のイメージの形を探し当てる作業という一面さえ有している。

だからこそ、形式主義的な面ばかりが先行している場合においてさえも、「to compose」という考え方を基盤にしている限りは、書く以前には見えなかった事柄ばかりか、時には存在さえ怪しい事柄さえも、言葉の力を借りながら、書き手の内部で次第に明確な形を持ち、書き手の面前に姿を現すのは当然の帰結なのである。

そして、それこそが森岡がコンポジション導入に託した「書くこと」の本当の価値だったのではないだろうか。

１１，まとめと今後の可能性

森岡がコンポジション理論に託したものが、過程重視の表現活動だということはこれまでの考察の結果、明らかだろう。ただ、コンポジション理論は、森岡の定義とは裏腹にいくつかの矛盾を抱え、しかも、実際の過程はあくまで指導過程であった。ところが、「文章構成法」を錯覚と言い切った後の森岡の中では、重視すべき過程は表現過程となっていく。そのことは、次のような森岡の発言からも明らかである。

> 現在、文章の書き方について単行本はたくさん出ていますし、講座もありますし、文章をいかに書くかという基礎論は今や一般に普及した。にもかかわらず、作文教育が満足できる状態ではない、基礎論だけで勝負できないということがはっきりしてきたと思うんです。
>
> それなら、どうしたらいいか。その基礎論の背後にあるいろんな言語問題、文章、文体それから人間の感情、心理あるいは人間の論理的な思考と文章のかかわりというものをもっと掘り下げてくる必要があるんじゃないか。[87]

つまり、後年の森岡の中では、指導過程として挙げられる「文章を書く手順」の下にある、学習者個々の表現過程に目を向け始めたと言えるのである。

ただ、表現過程重視の文章表現学習を実際に行うとすれば、学習者の数だけある表現過程にどう対処していくかという問題が生まれる。そして、従来の方法のみでは、理念としては理解されても、現実問題ではそれが不可能と考えられてもきた。だが、もしも、コンピュータを文章表現学習に導入するならば、また新たな展開も可能だろうし、そこにこそ、文章表現学習の意味と価値が生徒に生徒にとっても、教師にとっても価値を持つのではないだろうか。

86　森岡健二・林大・林四郎座談会「作文教育の目標」『現代作文講座７　作文教育の方法』所収
明治書院　昭和５１年１１月刊　Ｐ、３０５

87　森岡健二・林四郎対談「これからの作文教育」（上）『現代作文講座　第２巻　付録月報』明治書院　昭和５１年１０月刊　Ｐ、４